

本文で言及したスーフィーの人名表記および没年は『岩波イスラーム辞典』(大塚和夫ほか編、岩波書店、2002年)の記述を優先したため、一部出典のままではない。

参考文献

- シンメル、アンネマリー 1988「古典的スーフィズム——神秘思想とその象徴的表現」『イスラーム思想2』(小田淑子訳) 岩波書店.
- ニコルソン、R. A. 1996 (1980)『イスラームの神秘主義——スーフィズム入門』(中村廣治郎訳) 平凡社.
- Arberry, Arthur J. 1950. *Sufism: An Account of the Mystics*. London: Allen & Unwin.
- Baldick, Julian. 1989. *Mystical Islam: An Introduction to Sufism*. New York: New York University Press,
- Chabbi, Jacqueline. 1972. “Remarques sur le développement historique des mouvements ascétiques et mystiques au Khurason,” *Studia Islamica* 46, pp. 5–72.
- Ernst, Carl W. 1997. *The Shambhara Guide to Sufism*. Boston and London: Shambhala.
- Karamustafa, Ahmet T. 1993. *Vahidi's Menakib-i Hvoca-i Cihan ve Netice-i Can*. Cambridge, Mass.: The Department of Near Eastern Languages and Civilizations, Harvard University.
- . 1994. *God's Unruly Friends*. Salt Lake City: University of Utah Press.
- Knysh, Alexander. 2000. *Islamic Mysticism: A Short History*. Leiden, Boston and Köln: Brill.
- Lewisohn, Leonard (ed.). 1999 (1993). *The Heritage of Sufism: Classical Persian Sufism from Its Origins to Rumi*. Oxford: Oneworld Publications.
- Nicolson, Reynold A. 1914. *The Mystics of Islam*. London: G. Bell and Sons.
- Schimmel, Annemarie. 1975. *Mystical Dimensions of Islam*. Chapel Hill: University of North Carolina Press.

(石田 友梨 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Hossein Askari, Zamir Iqbal, and Abbas Mirakhor. 2009. *New Issues in Islamic Finance and Economics: Progress and Challenges*. Singapore : John Wiley & Sons.

1970年代に商業ベースでのイスラーム金融の取り組みが始まって以降、イスラーム経済やイスラーム金融についての様々な研究が行われてきており、それらの研究は「イスラーム経済学 (Islamic Economics)」と総称されている[長岡 2008: 280]。長岡慎介による研究サーベイによると、イスラーム経済学における研究は大きく2つのアプローチに分けられる[長岡 2006: 237–243]。1つは、現代世界にイスラーム経済システムを再興させることをめざす場合にどのようなしくみが望ましいのかを考える理念的な研究であり、もう1つは、イスラーム金融の具体的な業務(金融商品の開発、金融サービスの提供など)がいかに従来型の金融システムと競争しうるかという事例中心の金融論的研究であった。

しかし、長岡[2006]でも指摘されているとおり、両者のアプローチはいずれも、掲げられた理論が本当に実効性を持つのか、また、実態からの理論的検討へのフィードバックがあるのか、といった問題をはらんでいた。近年では、従来からの研究アプローチの限界を打破することをめざした研究がさかんになりつつある。評者の所属する京都大学でも「京都大学イスラーム地域研究センター」

がイスラーム経済研究ユニットを設け、これまでの既存研究を批判的に踏まえたイスラーム金融の理論と実態の総合的な検討を行うべく、海外の大学・研究機関と協力して2007年から様々な研究シンポジウム、ワークショップを開催している。本書評の対象も、既存研究のアプローチには収まりきらない問題関心と研究アプローチが見られるという意味において、既存研究を批判的に踏まえてイスラーム金融の理論と実態を総合的に検討しようとする潮流に含まれるであろう。

本書は、専門分野を異にする3人の経済学者の共著である。ホセイン・アスカリーは、中東地域を対象とした開発経済、国際経済を専門とする経済学者であり、1980年代にはサウディアラビアのエネルギー部門の開発政策に携わった経歴を持っており、より経済・金融の実務に近いスタンスを取っている。ザミール・イクバルは、世界銀行に所属する国際金融の専門家であるが、イスラーム金融の実態にも精通しており、この分野での著書もいくつか執筆している。たとえば、アッバス・ミラホールとの共著『イスラーム金融入門——理論と実践』[Iqbal and Mirakhor 2007]は、イスラーム金融の体系的な入門書として好評を博している。アッバス・ミラホールは1980年代の半ばから国際通貨基金(IMF)に所属し、イスラーム金融の発展の初期段階からこの分野に注目し、主に、経済理論モデルを用いた分析を牽引してきている。このように本書は、イスラーム金融を専門とする2人に国際経済の専門家アスカリーを加えた共同作業を通して、広い視野からイスラーム金融を捉えている。

本書は12章から構成されており、第1章から第5章までは、イスラーム金融の現状と直面する課題に焦点が当てられている。第6章から第7章では、イスラーム金融の実践が直面している具体的な課題に対する理論的な検討や実践に適用する際の展望が提示されている。第8章から第12章までは、従来型金融では提供しえないイスラーム金融独自の金融サービス、財政やイスラームの社会システムにおける利点を生かした現代のイスラーム経済における経済システムのあり方が検討されている。

以下で各章の内容を見ていきたい。まず第1章では、イスラーム金融の実践の展開が概観され、近年のイスラーム金融の現状や直面する課題について導入的な議論が紹介されている。1970年代のイスラーム金融の商業ベースでの取り組みの開始の背景には、オイルショックに代表される原油価格高騰があることはよく知られているが、本書では、産油国における金融への産業移転に対する積極的な姿勢がその成長を後押ししたことが指摘されている。その上で、1990年代から現在に至るまでのイスラーム金融の成長が述べられているが、ここでは特に、イスラーム諸国から非イスラーム諸国への地理的拡大、あるいは世界展開の過程が描かれている。その中で、イスラーム金融においても、従来型金融で活発に議論されてきたコーポレートガバナンスやリスク管理の問題が組上にあがり始めたことが指摘されている。その一方で、イスラーム金融内部からも現状批判が出てきていることにも触れている。

第2章では、本書が取り上げるイスラーム金融の抱える課題について概観されている。イスラーム金融は、従来型金融と比べて歴史と経験が浅いこともあり、一般的な金融論が行っている近代経済学をベースとした理論モデルを用いた議論や分析が十分に行われてこなかった。本章では、イスラーム金融の成長に伴って従来型金融と競合する場面が多くなりつつある現状において、そのような議論や分析を行うことの必要性が説かれている。たとえば、金融システムの制度設計やインフラ整備のあり方、イスラーム金融機関が直面する様々なリスクの管理の問題などが挙げられている。それに加えて、イスラーム金融特有の課題にも触れられており、イスラーム法学者による業務監督の問題や、イスラーム金融の存在意義に関わる従来型金融にはない業務展開の必要性等が挙げられ

ている。

第3章では、金融システムのグローバル化におけるイスラーム金融の位置づけが試みられている。金融システムのグローバル化の下では、情報の迅速な共有が可能になり、資金の国際移動が容易になったことから、金融資産のリスク分散や安全度が向上したといわれている。しかし、従来の国際金融が、実際には期待されていたほどは投資や雇用の増加、格差や貧困削減に貢献しなかったことが指摘され、イスラーム金融が従来からの金融システムがなしえなかった経済問題を解決しうることが述べられている。

第4章では、グローバル化のイスラーム諸国に対する意義づけがなされている。そこでは、グローバル化が、イスラーム諸国にとって社会的・経済的正義を実現する格好の機会であったにもかかわらず、多くの国がそれに失敗していることが述べられている。たとえば、雇用の問題については、グローバル化の波に乗った先進国では、民間セクターが雇用を創出する主な役割を担っているが、多くのイスラーム諸国では、民間セクターの発展が阻害されており、効率的な雇用機会の創出が実現していないことが指摘されている。

第5章では、近年の金融技術や金融制度の発展に対するイスラーム金融の対応のあり方について、現況も含めて概観されている。従来型金融は、21世紀に入っても革新的な金融技術を開発し、より柔軟な金融制度を導入することで、その利便性や効率性をさらに向上させている。そのような従来型金融に対する競争力を維持するためにも、イスラーム金融でも同様の金融技術や金融制度を導入していく必要があることが指摘されている。そして、そのようなイスラーム金融の内部的なイノベーションを円滑に進めていくためにも、イスラーム開発銀行(IDB)やイスラーム金融サービス委員会(IFSB)のような国際的な機関の十分なサポートが必要であることが述べられている。

第6章では、イスラーム金融におけるレピュテーション・リスクが取り上げられており、それに対する認識の欠如が指摘されている。レピュテーション・リスクとは企業の事業内容によってどのような評判やイメージが構築されるかに関わるリスクを指す。

本書では、事例としていくつかのイスラーム金融機関を取り上げて(Ihlas Finances [トルコ]、Islamic Bank of South Africa [南アフリカ]、エジプトにおけるイスラーム投資会社)、それらの失敗例から、イスラーム金融におけるレピュテーション・リスクの重要性が検証されている。レピュテーション・リスクに対する認識は金融機関のあらゆる事業に関連するために、その複雑さゆえに実体が把握しづらい。レピュテーション・リスクを抑えるためにガバナンスの強化、シャリーア委員会の役割強化、透明性の向上などが必要であることが指摘されている。

第7章では、資産価格決定のためのベンチマークの設計のあり方について検討がなされている。従来型金融では、資産価格は理論的に市場の均衡によって決定されるが、イスラーム金融では、イスラーム法のレジティマシーを確保する必要があるため、必ずしも市場均衡によって価格が決定されない。そのことを踏まえた上で、本章においてイスラーム金融における資産価格の決定のためのベンチマークがいかにか可能であるかが議論されており、利子に関わりのない要素からのベンチマーク・インデックスの設計モデルが提起されている。

第8章では、イスラームにおける無利子ローンの手法として知られるカルド・ハサンに着眼し、この手法をベースとしたマイクロファイナンスの可能性が述べられている。マイクロファイナンスは、困窮層のエンパワーメントのための有力な手法としてすでに多くの途上国で導入されている。これを受けて、近年のイスラーム金融においても、イスラーム的なマイクロファイナンスのあり方が積極的に模索されている。本章では、イランでの取り組みが事例として挙げられており、イン

フォーマルな金融セクターであるにもかかわらず、長年にわたってイラン国内の金融システムにおいて重要な役割を果たしていることが明らかにされている。

第9章では、イスラーム金融の現状が抱える課題を解決するためのイスラーム経済理論の構築の必要性が述べられている。そこでは、20世紀半ばからのイスラーム経済の成果を積極的に評価しつつも、いわゆる経済学が時間をかけて作り上げてきた包括的な方法論の確立にはほど遠い状態にあることが指摘され、ディシプリンとしての体を成しうる知のインフラストラクチャーの構築が早急に必要であると論じられている。それがイスラーム金融の抱える課題を解決し、イスラーム的に望ましい経済システムを再構築する最良の方法とされる。

第10章では、イスラーム諸国における経済発展の現状やその方向性が取り上げている。そこでは、多くのイスラーム諸国の政府は、現状として、イスラーム体制維持のためのツールとして利用しているに過ぎず、イスラーム金融以外のイスラーム的な経済制度の活用に関心である点が批判されている。

第11章では、イスラームにおける税制のあり方が公的支出の観点から検討されている。イスラーム世界においては近代以前からザカートと呼ばれる税徴収システムが存在したが、現状ではザカートを税制として用いている国はほとんどない。本音では、ザカートを現代的な文脈で再構築することの難しさを指摘しつつも、イスラーム的に望ましい包括的な税制の構築が必要であることが論じられている。

最終章である第12章では、産油国におけるソーシャル・セーフティネットに焦点が当てられている。ソーシャル・セーフティネットとは、貧困削減を目的とした相互扶助関係を社会に構築し、個人を貧困などの脅威から保護し、生活を保障するための制度である。イスラームにおいては、ザカートやサダカといった相互扶助システムが発達してきたが、多くの産油国では、貧富の格差が大きく、必ずしもイスラーム的な公平性が実現されていないことが指摘されている。このような事態は、イスラーム諸国の経済発展にとっては危急の課題であり、イスラーム的なセーフティネットの導入の必要性が説かれている。

最後に、本書の全体について以下の点を強調しておきたい。イスラーム金融の抱える新たな課題の一つにレピュテーション・リスクといったリスクの管理を充実させる必要があると第6章で述べられ、リスクの対策を練り、イスラーム金融の信用を確立し、宗教的義務を遵守することが要請されている。そうすることによってイスラーム金融の顧客の期待を維持し、新たな顧客獲得に結びつくことが挙げられている。イスラーム金融におけるレピュテーション・リスクの問題を明示したこの指摘は、きわめて重要であろう。その政治的な背景として9.11以降マネーロンダリング対策の一環である、アンチマネーロンダリング（AML）やファイナンス・オブ・テロリズム（CFT）などの金融の規制強化が世界的に推奨されていることが言及されている。リスクは性質上、科学的実証ができない不確実な損失を孕み、損害規模・影響を事前に把握できない状況に陥り、信用や明確な統計データを提示することが難しい。更に、リスク管理の問題として新たなリスクが生じた際、既存の行政システムが機能不全に陥る危険性がある。加えて、新たに生じるリスク対策が技術開発や自由な経済活動の弊害とされる懐疑的・否定的意見が表明されることが懸念される。本書が、レピュテーション・リスク対策として、ガヴァナンスの強化やシャリーア委員会の役割といったシステムの見直しを過去のイスラーム金融の失敗に照らして提示していることは卓見と言える。

さらに、それにとどまらず、今後はイスラーム金融がさらに発展していくなかで、取引に関わる民事紛争の解決が円滑にできるか否かが、レピュテーション・リスクに関わる重要なファクターと

して浮かび上がってくるように思われる。なぜなら、民事紛争が起こった場合に解決手段がしっかり整備されているかどうかは、イスラーム金融を利用しようと思っている顧客にとって、実際に利用するかどうかを決める大きな要因になるからである。本書では、この側面については触れられていないが、今後の研究において重要なトピックとなるであろう。

同時に、そのような紛争解決の場で判断を下す専門家をどのように育成していくかについても、この側面のインフラ面の課題として検討すべき課題であるように思われる。本書でもイスラーム金融に通じた専門家の不足が指摘されているが、それは、イスラーム金融商品の開発の局面で商品の認可を行うための専門家という文脈においてである。実態としては、イスラーム法学者の不足の問題は、イスラーム金融に関わる民事裁判における裁判官のイスラーム法の知識不足や、そのような民事紛争に対応できる司法制度が未確立であるという点においても、深刻な問題となっている。このような人的インフラの整備のあり方については、イスラーム金融研究においては、その重要度に比べてほとんど考慮されてこなかった。この点も、理論と実践を統合してイスラーム金融を考察する上で、今後取り扱うべき重要なトピックであろう。

以上のように、本書にはイスラーム金融の最前線のイシューが数多く取り上げられており、この分野の研究者やイスラーム金融の実務に関わる専門家にとって、今まさに手に取るべき一書となっている。

参考文献

- 長岡慎介 2006「現代イスラーム金融研究のための分析枠組み——理論と実践の学際的総合をめざして」『アジア・アフリカ地域研究』5(2), 224-252 頁.
- 2008「研究動向:2つの国際会議からみたイスラーム経済研究の現在」『イスラーム世界研究』2(1), 279-284 頁.
- Mirakhor, A. and Z. Iqbal 2007. *Introduction to Islamic Finance: Theory and Practice*. Singapore : John Wiley & Sons.

(川村 藍 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)